【高等学校・その他の体験活動】

伝統文化体験学習・上対馬高校舟グロー大会

長崎県立上対馬高等学校

学校の概要

① 学校規模

○ 学級数：７学級

○ 生徒数：２０２人

○ 教職員数：２５人

② 体験活動の観点からみた学校環境

○ 全国で４番目に大きな対馬島は南北８２km，東西１８kmの細長い島で，平地が少なくその８９％を山林が占めている。全島人口の大半は南部の２町に集中している。島内に３つの県立高校があり，中央部の豊玉高校と北部の上対馬高校はかつては厳原町にある対馬高校の分校であった。

本校へは上対馬町（人口５，３５６人）上県町（人口４，６９１人）の２町から生徒が通っている。しかし２町（８中学校）の卒業生のここ３年間の本校への進学率は平均５６％であり，他の生徒は本土の学校や対馬高校へ進学している。

生徒減に歯止めをかけるための実績作りと魅力ある学校作りに努力している。

○ 本校で平成１１年度から舟グロー大会を始め，そのことがマスコミに大きく取り上げられたことが一つのきっかけとなり，舟グローの文化的あるいは教育的価値を見直し，継承していこうとする機運が盛り上がっている。

③ 連絡先

○ 〒８１７－１７２２
長崎県上県郡上対馬町大浦２３０

○ 電　話：０９２０８－６－２１１１

○ ＦＡＸ：０９２０８－８－９２８３

○ ホームページ：http://www4.ocn.ne.jp/~kamiko/

○ 電子メール：kamikoh@crocus.ocn.ne.jp

体験活動の概要

① 活動のねらい

○ 風化しつつある地元伝統文化を継承し，後継者を育成する。

○ 生徒が直に郷土の伝統文化に触れることで，郷土への愛着心を育てる。

○ 和舟を協力して漕ぐことで，クラスの団結力を高める。

② 主な活動内容・方法（位置付け・期間）

○ 櫓漕ぎの基本的技術習得
櫓と海に慣れる（１時間）
右櫓と左櫓の違いを知る（１時間）

○ チームとしての舟の操作習得
とも櫓（舵取り）（１時間）
采切り（あやきり）・手木（てぎ）の体験（１時間）

○ クラス対抗舟グロー大会
大会準備・片付け（１時間）
舟グロー大会（３時間）

③ 体制等の工夫

○ 大浦舟グロー保存会との連絡・協議

○ 上対馬町役場・大浦区長・河内区長との連絡・協議

○ ＰＴＡとの連絡・協議

④ 活動の成果等

○ 地域の人との関係が密接になった。

○ 練習することの大切さを実感した。

○ クラス内の団結力が強まった。

○ 他の行事への取り組みが積極的になり，リーダーシップが育ってきた。

１　活動に関する学校の全体計画

（１）活動のねらい

ア　風化しつつある地元伝統文化を継承し，後継者を育成する。

＜舟グロー（写真①）とは＞

かつて対馬には，櫓漕ぎの和舟（地舟）は日常の生活になくてはならないものであった。地舟を使う競漕（舟グロー）は「舟くらべ」からきたとも言われ，村人の数少ない娯楽の一つであり，大切な神事でもあった。昭和３０年代になると，道路や自動車・船外機船の発達，普及によって和舟は急速に姿を消し，それに伴って舟グロー大会もすたれてしまった。

昭和６０年代から平成のはじめにかけて，各町で舟グローを町のイベントの一環として復活するようになり，現在，上対馬町以外の対馬５町に役場で所有管理している舟が２艘ずつ，上対馬町には３地区の舟グロー保存会所有の舟計４艘がある。町によって舟の大きさは異なり，上対馬町は７丁櫓の舟である。

現在は夏祭り等で，各町で舟グロー大会が行われるようになったが，過疎化・高齢化が進み，開催者は参加チームを集めるのに苦労しているのが現状である。

写　真　①

イ　生徒がじかに郷土の伝統文化にふれることで，郷土への愛着心を育てる。

本校においては卒業と同時に島外へ出て行く生徒が多いが，離島出身という気持ちを持って島を離れていく生徒も多い。どこにも真似のできない，本校でしか体験できないことを身に付けさせ，自信を持ち，郷土への誇りを持たせることとしたい。

また，豊かな島の自然を生徒たちは当然のこととして受け止めており，そのありがたさを認識する機会が少ないので，美しい海を舞台にした行事をすることで，自然を守ることの大切さにも気付かせたい。

地舟は昔，漁や農作業に欠かせないものであった。平地が少なく，田畑へ行くにも険しい山道を越えて行くより舟の方が便利であった。地舟に牛や馬を乗せ，耕地で作業をし，収穫したイモやソバをまた舟に積んで帰った。櫓を押して韓国まで渡り，釜山で買い物もした。舟グロー体験は，そうした先祖たちの暮らしを理解するための優れた学習機会である。

ウ　和舟を協力して漕ぐことで，クラスの団結力を高める。

７丁櫓の和舟は，１丁の櫓に「漕ぎ手」と補助役の「とっつき」がかかり，舳先に漕ぎ手の指揮をし，鼓舞する応援団長的役の「采切り（あやきり）」と，拍子木を打って漕ぎ手のペースを保つ「手木（てぎ）」が乗り，計１６名で舟を操る。狭い舟で漕ぐため，左右対の漕ぎ手は背中がぶつからないように，左側が櫓を押した時は右側は引く。すぐ後の対は，前の対と逆の動きになるように，リズムと力を合わせないと舟は真っ直ぐ進まない。

（２）全体の指導計画

ア　活動の名称

「伝統文化体験学習・上対馬高校舟グロー大会」

イ　実施学年

全学年（７クラスのクラス対抗・職員チーム，ＰＴＡチームも参加）

ウ　活動内容

（ア）事前学習

クラス毎ホームルームで舟グローについての学習

（イ）クラス毎の練習（２時間）

櫓漕ぎの基本的技術習得・右櫓と左櫓の違い体験

（ウ）チームとしての舟の操作習得（２時間）

選手選考・ポジション決定

ホームルームでとも櫓（舵取り）・采切り・手木等各ポジションの練習，スタート・全力操法・方向修正等の練習

（エ）クラス対抗舟グロー大会（４時間）

大会準備・舟グロー大会・片付け

エ　教育課程上の位置付け

（ア）教育課程内の体験活動として位置付ける。

（イ）活動内容の位置付けは，特別活動の学校行事とする。

オ　実施時期（日数や時間数）

（ア）７月の期末試験終了時から約１週間の練習期間を設定し，各クラスとも午後から合計４時間の練習時間を確保。１日に２クラス２時間ずつ練習をする。（２艘の舟を使用）

（イ）舟グロー大会は日曜日とし，曜日を振り替えて実施する。保護者・地域住民の，生徒たちの活躍を応援したいという強い要望に応えるためである。

カ　活動場所

練習・大会本番ともに長崎県上県郡上対馬町大浦漁港（学校から徒歩で１５分の距離）

キ　継続の状況等

平成１１年度から始まった行事で，特色ある学校行事として注目を集めており，地域の夏の風物詩としても定着してきた。

〈平成１４年度以降〉

平成１３年度の第３回大会までは，大浦舟グロー保存会所有の舟と，他地区保存会の舟を借り上げ，運搬してきて２艘の舟で練習・本番をしていたが，間もなく民間団体の支援で学校で自由に使える舟の建造が始まる予定である。間に合えばこの夏からは大浦区に２艘の舟が揃い，いつでも生徒たちが使えるようになるだろう。

また，長崎県下高等学校の中から，「地域に生きるマイ・スクール推進事業実施校」の一つに指定され，舟グロー用のハッピを準備することにした。平成１４年度からは，クラス毎色の違うハッピをユニフォームとして着用し，これまで以上ににぎやかで楽しい舟グロー大会となりそうである。

生徒たちは，学年が進むにつれて櫓漕ぎの技術も向上し，他の地区での舟グロー大会にも積極的に参加するようになった。毎年の学校行事として，本校の伝統として継続していくこ

とに意義があると考える。

新船の建造に当たっては，その工程などをビデオ等に収めて，後継者の少ない和船の船大工の貴重な資料として残したい。

2　活動の実際

（1）事前指導

ア　舟グローについての教員の学習

教材：過去の大会のビデオ／学校におけるこれまでの研究成果

「対馬における舟グローについての考察」

イ　ホームルームでの舟グローについての意義の説明等

指導者（舟グロー保存会）への礼儀指導と安全指導

（2）活動の展開

ア　練習計画

生徒会で立案（平成１３年の例：クラス別練習７月５日～１３日，大会１５日（日））

イ　活動の場や施設

学校から徒歩で１５分の所にある大浦湾が練習・大会の会場となる。広い埋立地があり，練習時からテントを設営する。

ウ　指導者・協力者

写　真　②

写　真　③

本校の舟グロー大会は，全面的に「大浦舟グロー保存会」に支えられている。昔から各地区の舟グローの世話は，地区の世話役（区長）が兼ねていた。この保存会が正式にできたのは平成元年だが，会則や名簿があるわけではなく，運営は大正以前から今日まで続く「常会」と呼ばれる総会で決められる。大浦区は毎月２０日となっている。平成１１年５月の常会に教頭が出席し，舟グロー大会の主旨を説明し，指導・協力を依頼した。時期的にも都合がいいということでボランティアで練習時から全面的に協力していただけることになった。このメンバーの方々の大部分は，昭和６１年６月に，櫓を押し，９時間１５分かかって地舟で韓国まで渡った人達である。マスコミで大きく取り上げられ，過疎化の進む島の人々に大きな勇気を与える出来事になった。

保存会の方々は舟グローに対する情熱と誇りを持ち続けており，後継者問題を抱えていた時期でもあったので，学校の申し出を喜んで引き受けてくださった。

約１週間続く午後からのクラス別練習に，仕事や漁を休んで８～１０名の方々が集まって下さり，大会当日は早朝から会場の設営に協力していただいた。（写真②）

エ　生徒の活動の状況

毎年生徒たちはこの行事を楽しみにしている。保存会の方々の指導には大変素直である。大会運営は生徒会の係生徒がすべてを行うが，生徒たちはテキパキと行動し，運営もスムーズである。

予選はリンク・リーグで各チームとも対戦相手を替えて２レースずつ行い，合計タイムで順位決定。その際，必ず１レース目と２レース目は舟を替える。決勝戦は上位２チームで２レース実施する。これとは別に，女子舟グローを学年対抗で行う。職員チームを加えて４チームのトーナメントで実施する。１レースの勝負で，舟はくじで決める。

オ　指導や支援の実際

（ア）練習時

生徒は整列・挨拶・乗舟。（１６～２０名，１クラス２交代で実施）１艘の舟に４～５名の指導者が乗り込む。ハイコ（舟べりから櫓の握り手にかけるロープ）の張り方から足の構え，櫓の押し方等海上で指導を受ける。船外機船を出すこともある。

（イ）大会当日

各クラスの担当指導者決定。（写真③）とも櫓（最後尾の櫓で舵取り）は，事故防止のため指導者がつく。船外機船２艘を出し，各レースのスタート（写真④）や，救助等にも当たる。

カ　教材や教具：地舟２艘

生徒は夏の体育時の体操服で練習・大会。平成１４年度からはハッピ着用

（３）事後指導

舟グロー大会後すぐ夏季休業に入るが，地域の舟グロー大会に積極的に参加するよう指導する。クラスや部活動，あるいは同一地区の生徒でチームを組む。

８月１５日前後の上対馬おっどん祭り，９月第一日曜日の大河内地区舟グロー大会，１１月３日の上県やまねこ祭り等に参加する。

3　体験活動のための体制

（１）学校の体制，家庭や地域，関係団体・施設・期間等との連携

生徒指導部生徒会中心に企画・運営する。

対外的には教頭が窓口となる。舟グロー保存会との協議，連絡・調整，他地区の舟借り上げ依頼，ＰＴＡ・上対馬町役場・報道関係との連絡等

（２）活動の場や指導者の確保等の手立てや工夫

実施時期については，かつぎ（アワビ・サザエの潜りによる漁を許可された時期でこの地区の漁師の一番多忙な時期）と重ならないように十分連絡を取り合う。

（３）その他

ライフジャケット着用

4　成果と課題

（１）成果

生徒･･･「楽しかった」，「来年が楽しみ」，「難しい」，「昔の人の苦労がわかった」，「全国でこんなことできるのは自分たちだけだ」，「上対馬高校に入学して舟を漕ぎたい（中学生）」など。

教員･･･「毎年続けるべき」，「小中学生との交流ができないか」，「授業では見られない生徒の

生き生きした姿を見た」（写真⑤），「上手な生徒がいて驚いた」など。

保護者･･･「家での会話が舟グローで弾んだ」，「父親が上手に漕げることに子供が驚いた」，「昔のことを思い出した」など。

指導者･･･「生徒たちが上達していくのを見ることがたのしかった」，「道で会ってもよく挨拶するようになった」，「生徒に声をかけやすくなった」，「学校を身近に感じるようになった」など。

（２）課題

・　総合的な学習の時間との関わり合い

・　保険加入の問題

5　今後の取り組みの方向

特色ある学校行事としての定着を図る一方，上級生が下級生を指導できるような体制作りを考え，保存会の負担を軽くする方法を模索するとともに，総合的な学習の時間にも本活動を取り入れ，「ふるさと学」へとつなげていきたい。

写　真　④

写　真　⑤

【本事例活用に当たっての留意点】

本実践は，地元伝統文化を中心にした活動である。各地域には地域を反映した伝統文化があり，それを中心にした体験活動への期待は大きいものがある。実践に当たっては，歴史的経緯，保存状況，継承者（実施に当たっては直接の指導者に当たる），地域における伝統文化の存在意義，教育的価値等の視点から伝統文化の特質を総合的にとらえ，活動のねらいを設定し，対象学年，参加人数，実施時期等を決定していくことが大切である。さらに，本実践は地域住民の協力が得られやすい時期，安全，費用等の面にも配慮され，入念な計画と準備のもとに行われているのは参考になる。現在は学校と地域が連携・融合した特色ある学校行事として位置付けているが，更に「ふるさと学」として「総合的な学習の時間」への可能性を模索していることに期待したい。この活動を中核にして，地域や伝統文化に関する研究，調査などの活動を開発することで実現の可能性も見えてこよう。